

特別史蹟「平城宮跡」昭和三十年度発掘調査概要

特別史蹟「平城宮跡」は奈良時代帝都としてもうけられた平城宮の大極殿をめぐる朝堂院と考えられる中心的遺蹟で、大正年間これに保存工事が施され一部に諸種の遺構が発見されているが、系統的な発掘調査は未だ行われなかつたので一國の帝都としての中心遺蹟の全貌の調査は強く要望されていた。

たまたま昭和二十九年一月平城宮跡遺跡調査会において奈良市佐紀町の道路工事に伴う調査が行われ、東西約四百五十尺、南北約六十尺の広大な建築群が検出された。

この遺蹟群の朝堂遺跡群との関係、ひいては平城宮全体の考古学的調査がとりあづかれることになり、奈良国立文化財研究所ではその第一着手として奈良県教育委員会の協力を得て、昭和三十年八月一日から十三日まで平城宮跡大極殿跡東南の廻廊の発掘を行った。これが準備のため七月三十日より草刈および作業場所の整備をはじめ、発掘終了後八月十六日より二十一日にわたって発掘地の実測作業を行った。この間調査員延二百十名、人夫延三百六十名が作業に延事した。

今回は先ず大極殿を中心とする所謂朝堂院の外廊を明らかにする目的をもつて、大極殿跡の東南の廻廊の究明に力をそそぎ、大極殿の南に列ぶ十二堂の外側回廊との関係を求める方針をとつた。

ここを選んだ今一つの理由は大正十三年の保存工事に一部石敷が発見され、これを手掛とすることが出来るからでもあつた。

発掘の結果大正十三年に一部出たものより推定していた通り此処に南北に長く列なる回廊跡が発見された。発掘した礎石や礎石据付跡（礎石のとられた穴）から梁間二十尺（天平尺）柱間隔十三尺の複廊であつたことがわかり、大正十三年発見の石敷は回廊の面側の雨落溝であることが判明した。この回廊は発掘地奥の南端で西に曲折して大極殿の南前方を限る回廊となつてゐることが判明し、この奥では前代の藤原京と似た平面であることが判明した。しかし南回廊がそれ以南の十二堂の部分より四尺ばかり高い石壇上に作られてゐる点では後代の平安京の龍尾壇への発展を予想させ、まことに興味深いものである。

藤原京では大極殿南回廊はそのまま東に続いて十二堂外廊回廊になつてゐたが、平城京の場合は南回廊南端より三十尺北に入つたところから東に向つて幅十五尺ほどの土壇が続き、その上から枘穴のある一尺角あまりの礎石が南北に約五尺をへだてて二列発見された。その東西間隔は八尺五寸で、この壇上にも敷石があつたことが判明した。このやうなことは藤原京にも平安京にも見られぬ点で今後の究明を要するものである。

平城宮は恭仁、紫香祭、難波遷都後の復都や平城天皇の復都運動等もあつて、遺跡に改築の痕跡の残る可能性もあるので、この点特に注意をはらつたが、礎石に凝灰岩切石のものと花崗片麻岩ないし両輝石安山岩自然石のもの二種が見られ、後者が二次的に据えられた形跡を認めた他は著しい事実は見出されなかつた。この他平城宮建設前の遺跡として東回廊土壇の下から蓋型形象埴輪（蓋型）が見出された。

遺物としては瓦の他土師器、陶質土器等の破片が見られるのみで、これ等は目下奈良

国立文化財研究所において整理中である。文様瓦は何れも従来平城宮跡より多く見だされた二三種のを主とするが、一つ藤原京に多く使用されているものと同じ文様の瓦のあることは注目すべきであろう。

調査責任者	奈良国立文化財研究所長	田澤 坦
調査員	奈良国立文化財研究所	浅野 清・杉山信三・鈴木嘉吉
〃	東京国立博物館	田中一郎・坪井清足
〃	文化財保護委員会	齋藤 忠
〃	奈良県教育委員会	小島俊次・網千善教・伊達宗泰
〃	伏見高等学校	木村良雄
〃	奈良学芸大学	島倉已三郎・梅田甲四郎
〃	奈良女子大学	釣田正哉
〃	箸尾中学校	溝辺文和